

ウズベキスタンの刺繍業における キンドレッド貢献の逆説

今 堀 恵 美

I はじめに——問題の所在

本稿は中央アジア、ウズベキスタン共和国で行われている刺繍業（カシュタ：*kashta*）¹⁾を事例に、民営化事業への親族（特にキンドレッド：後述）の貢献のあり方とその問題点を描き出す。本稿で親族、特に親族間の葛藤の問題を取り上げるには二つの理由がある。第一に、2010年のクルグズの政変と民族間対立²⁾に代表されるように、中央アジア各国に広がる反政府運動やイスラーム主義運動に国際的関心が集まり [Naumkin 2005; Hiro 2009]、その背景としてソ連崩壊後の経済状態の悪化や雇用不安、貧富の差の拡大、親族・地縁など従来の社会関係の希薄化が指摘される反面、その多くは抽象的な表現にとどまり、何がどのように人びとの不安を煽っているのか具体的な言及が少ないこと。第二に、具体的事例をふんだんに盛り込んだ民族誌研究では、親族や地縁など地域社会における結び付きとその有用性に注目が集まり [Kandiyoti 1998; Werner 1998; Koroteyeva and Makarova 1998; 樋渡 2008]、人びとの社会関係における葛藤や軋轢といった問題から検討した論考³⁾は決して多いとは言えない点である。確かに欧米社会と比較すれば、相対的に中央アジア社会では親族や地縁の紐帯が人びとの間に深く根付き、体制転換や危機に対して社会なセーフティネットの役割を果たしてきた。だがソ連崩壊後のおよそ20年間で現地社会の人びとにとっての社会関係が劇的に変化を遂げたのも事実であり、ソ連時代を知る世代がノスタルジックに語る「ソ連時代の穏やかな人間関係」[ダダバエフ 2010: 216-218]と独立後の関係の変化を中央アジアの人びと自身の視点に立って描き出せなければ、彼らが身近に感じる不安を具体的に明示できないだろう。

本稿では、社会関係の希薄化の原因となる親族間の葛藤や軋轢の背景の一つとして、親族の貢献が互酬性に基づく相互扶助関係か契約に基づく権利義務関係（雇用）かをめぐって生じる解釈の差異にあることを指摘し、それに旧社会主義圏特有の要因——集団単位で利益を平等に配分しようとする社会主義的な関係と個人の利益追求を旨とする市場経済化の混在——が複雑に絡み合っていると論じていく。

本稿の構成は以下の通りである。第Ⅱ節では、対象となる刺繍業が「女性の仕事」であることから親族関係でも特にキンドレッド関係に着目する意義を論じ、フリーマン [1981] がキンドレッド研究で提起したアクション・グループの観点から整理する。

第Ⅲ節では、ウズベキスタンの民営化事業の典型として、刺繍業へのキンドレッドの貢献を取り上げる。第Ⅳ節で刺繍業におけるキンドレッドの貢献をめぐる事業主との葛藤や軋轢の事例を紹介し、その原因を市場経済化との関連から考察する。特に個人の貢献を全体に還元させるという社会主義的理念を反映した「共同参加領域」(後述)が広く浸透する中でのキンドレッドの貢献のあり方をめぐって軋轢が生じる点を指摘する。

Ⅱ キンドレッドとアクション・グループ

中央アジアに関する民族学・歴史学研究ではウズベク人は父系出自 (*avlod*) 社会であるとされる [Poliakov 1992: 53-54]。それは預言者ムハンマドの子孫を示すサイド (*sayyid*) やトラ (*to'ra*)、高名なイスラーム神秘主義者の子孫を示すイシャー (*ishon*)、アリーに先立つ3人の正統カリフの子孫またはイスラーム神秘主義の導師とその子孫を示すホジャ (*xo'ja*)、チングス・ハーンの子孫を意味するハーン (*xon*)、イスラームを信仰する君主を示すアミール (*amir*) といった多様な称号が主に父系出自を通じて継承され、系譜書 (シャジャラ: *shajara*) に記録されてきた事実による。ウズベク人の出自を示す姓 (*familiyasi*) も父姓継承を原則とし、旧ソ連圏では戸籍登録に父称 (*otasining isimi*) も併せて記入する。個人名、出自を示す姓と父称を合わせた3種類が個人を表す正式な姓名であり、登録のみならず日常の改まった場面で用いられる。従ってウズベク社会では (社会的に認知された) 父の系統を明確に認識すると言える。

それが事実であるにせよ、社会人類学ではある個人の帰属を規定する出自規制は地域社会の人々が日常的に関係をもつ親族の範囲と必ずしも重ならず、出自規制とは別の集団原理をもつ社会の事例も指摘されてきた [清水 1987: 80-86]。父系出自に基づく氏族意識をもつ中央アジア、クルグズスタンではソ連解体後の民営化過程で父系出自分節であるウルックを基盤に土地や資材を共有する集団が組織されていたが [吉田 2004: 76]、同じ中央アジアでも筆者が調査するウズベキスタンの村落部 S 地区では父系出自の認識はあっても、ある始祖を起点に結びつく氏族 (クラン) や系譜意識に基づく出自集団 (リネージ) が人びとに集団形成原理として常に意識されているとは言えない⁴⁾。後述するようにむしろ人びとが重視する親族関係の紐帯は、家族 (オイラ⁵⁾: *oilal*)、そして中庭付き住居 (ハウリ: *hovli*) 共住者の次には、キンドレッドであるヘシュ⁶⁾ (*xesh*) であった。

ヘシュは父系/母系、親族/姻族の別なく、自己に血縁もしくは婚姻を通じてつながる人間の連鎖として用いられる。日常的にヘシュは何親等、何世代までをヘシュとするというような原則は見あたらない。例えば、筆者は村落部の人々から「この人は私のヘシュ」と紹介を受け、その関係は「私の父方オバの夫の弟の嫁の・・・」と限

りなく続く連鎖を一通り聞かされた。すなわち、ヘシュとはエゴである自己を起点として父系、母系、及び婚姻の連鎖を通じて緩く結びつくカテゴリーであるキンドレッド関係といえる。またヘシュは言及 (refer) に用いられる言葉であり、呼称 (address)⁷⁾ ではない。ヘシュ同士は各親族名称⁸⁾ で呼び合う。自己の配偶者と子どもはオイラとされ、ヘシュとして言及されることはない。またヘシュの対義語はベゴナ (*begona*: 他人)⁹⁾ であり、ヘシュとは家族でも他人でもない人々なのである。

ヘシュは自己につながる範囲にある人びとを指す言葉だが、後述するようにヘシュ関係にある個人はみな同じ行動を期待される訳ではない。ウズベキスタンのヘシュ関係にある人々は儀礼参加や日常的な交流を繰り返すことで関係を強化する。ヘシュは慶弔時¹⁰⁾ や祭日¹¹⁾ に贈物や金銭を持ち合い、料理準備を手伝い、来客をもてなし、儀礼の各段階を取り仕切り、中心的な采配を振るう人々である。日常的にはパーティ (*o'tirish*)¹²⁾、誕生日会 (*tug'ilgan kuni*)、厄除けに関する一連の儀礼 (*osh bibi seshanba, mushkul kushod* など) を機会に頻繁に往来して情報交換を行い、有形無形の援助をする間柄と期待されている。ゆえにヘシュとは、親族カテゴリーであるに加え、互酬性に基づく相互扶助を維持する関係にある人々といえる。

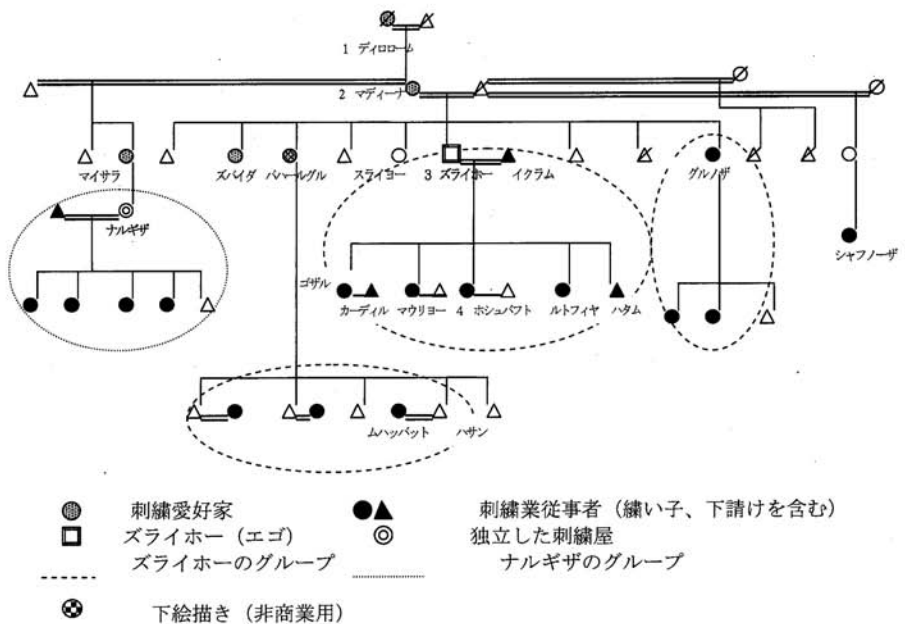
キンドレッド概念を整理したフリーマンも指摘するように、キンドレッドは血讐や贖罪の義務という具体的目的をもつ場面でこそ重視される [フリーマン 1981: 203-205]。特定目的の下にキンドレッドの一部成員や友人などが集まり、一時的に形成される集団をフリーマンはアクション・グループ (action group) と呼んだ。彼はキンドレッドについて、ある個人が一定規模を要するアクションを起こそうと望む場合、メンバーとして最重視される傾向にある人びとと述べている。

もっともアクション・グループ形成にキンドレッドを呼び込もうとする場合、起点となる個人のジェンダー、アクションの内容によって呼び込むキンドレッドの範囲も変化するだろう。例えば筆者が調査したS地区では、起点個人が男性で家屋修復などの共同労働への参加を求める場合、父系出自に基づいた優先順位に沿ってアクション・グループへの参加成員が選定される傾向にあった。これは夫方居住を取るウズベク社会において兄弟同士が地理的に近い場所で暮らしているという事情による。だが本稿で取り上げる刺繍業には女の仕事というジェンダー規範があり [今堀 2007]、起点個人も活動参加者もほぼ女性で構成される。ゆえに本稿では女性が主体となるアクション・グループについて考察していきたい。

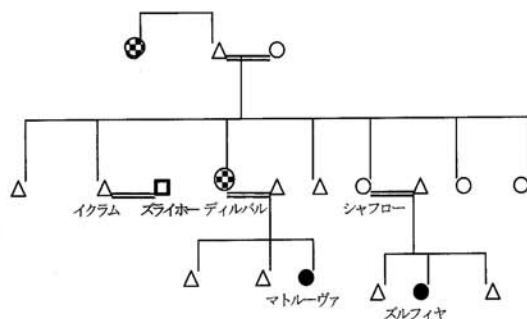
女性がアクション・グループを形成する場合、男性と異なり集団形成原理として父系出自のみが優先されることはない。むしろ姻族や母系親族も重んじられる傾向にある。それには結婚後の居住規制により父系出自で結びつく女性たちの大半は出生地を離れた結果、遠隔地の居住者同士は日常的な行き来がしづらいという現実的事情もある。ヘシュの中でも同じ中庭付き住居に共住する人々、特に夫の兄弟の妻たちとは日常的に協働しがちであり、一般的に男性より父系出自の原理に拘束されにくいといえ

よう。

もっとも以下の事例で示すように、特に共通の活動目的や目標達成のために集まるアクション・グループでは日常的なつき合いの度合いより、活動目的や内容に相応しい能力をもつ成員が求められる傾向にあり、日頃さほど親密な関係にはなかった個人同士がヘシュとして再カテゴリー化されて関係強化される場合もある。ゆえに、アクション・グループに集まる諸個人にとって目標達成こそが重視され、ヘシュ特有の互酬性に基づいた相互扶助だけを行える訳ではない。とはいえ、キンドレッドの貢献を活動や目標の効率的な達成に主眼をおく近代的企業やアソシエーションにおける権利義務関係と同等に扱うわけにもいかない。キンドレッドを含むアクション・グループでは、単に互酬性に基づく相互扶助関係でも、効率的な目標達成といった権利義務関係だけでもない独自の規範が支配するのである。このアクション・グループ特有の規範に関して、次節でウズベキスタンにおける刺繍業の事例から検討していこう。



〈図1〉 刺繍家ズライホーのヘシュと刺繍業貢献図



※ 上記の親族関係は聞き取りで確認できた部分のみ

〈図2〉ズライホーの姻族関係図と刺繍業貢献図

III 事例研究——刺繍家ズライホーとヘシュ

1 刺繍業におけるヘシュの貢献

筆者が調査を行ったS地区では、1991年のウズベキスタン独立以降に刺繍業が事業として発展した〔今堀 2006b〕。以下ではこの地区で初めて刺繍業を発達させたズライホー（1953年生ウズベク女性、以下名前は全て仮名）の事業を事例に取り上げる。ズライホーは独立後、新たに個人で刺繍事業を興し、2006年の調査時点では下請けの繡い子100名以上を数える企業にまで成長させていた。本節ではこのズライホーの刺繍業に彼女のヘシュ¹³⁾が行った貢献を取り上げ、その特徴を整理する。

まずズライホーのヘシュについて簡単に述べておく。ズライホーの姓は父系出自規制に則り父姓及び父称を名乗る。ズライホーの父母は双方ともに再婚であり、ズライホーの父にとってズライホーの母マディーナは3番目の妻である（図1参照）。ズライホーにとっての異母キョウダイは父の1番目の妻の子供2名と2番目の妻の子供1名を併せた3名であり、父母を同じくするキョウダイは8名（1名は夭折）である。従ってズライホーと同姓のキョウダイは11名になる。だがズライホーの母マディーナには前夫との子供が2名おり、ズライホーの異父キョウダイにあたる。従って異父異母、同父母のキョウダイを併せると13名である。この場合、同姓キョウダイも異姓キョウダイも同等の親族名称で呼び合い、キョウダイの子供たちや配偶者もヘシュと総称される。

姓が父系ラインで継承されたとしても、「女の仕事」である刺繍は母系ラインに沿って継承される技能である。ズライホーによれば、刺繍の師匠の第一代目にズライホーの母方祖母であるディロローム（1965年逝去）、第二代目に母マディーナ、そして自らを第三代目と見なし、ズライホーの後継者である三女ホシユバフトを第四代目と

する。図1における数字がズライホーの主張に沿った刺繍の師匠称号継承ルートである(図1参照)。ズライホーの刺繍を扱った小冊子の巻頭写真では、ズライホー、母マディーナ、三女ホシュバフトの3名のみ刺繍を手に乗っており[Obloberdieva 2002: 1]、一子相伝という形で師匠の称号が継承されてきたことが示されている。

だがこれはズライホーの見解であり、第一代目とされるディロローム自身が刺繍師匠の創始者を自認していた訳ではない。2003年の聞き取り時点で84才だったズライホーの母マディーナからの聞き取りでは、彼女は母から刺繍技術を習い娘に技能を伝えたが、事業開始後のズライホーのように師匠と自称せず、商品用刺繍を制作しなかったばかりか、結婚後は刺繍制作に殆ど従事しなかった。そのうえ技能継承の仕方についても、ズライホーの主張の如く複数いる姉妹の中で1人にもみ特定の師匠の称号を継承させるのではなく、娘たち全員に平等に刺繍技術を伝えたという。マディーナの話から師匠称号継承については、刺繍事業を興した時点でズライホーが過去に遡及する形で後付したと推測できる。

マディーナの語りが事実であれば、彼女は自らの娘たち全員(マイサラ、ズバイダ、バハールグル、スライヨー、ズライホー、グルノザ)に刺繍技術を伝えているはずである。筆者が聞き取りを実施できたマイサラ、バハールグル、グルノザは皆刺繍技術をマディーナから習い、自らの結婚持参財に刺繍で装飾した品物を用意していた。特にズライホーの姉バハールグルは自ら下絵も描いて刺繍を施す刺繍愛好家であり、彼女の部屋一面に刺繍が美しく飾られていた。未婚時代にズライホーやバハールグルが勤めた搾乳会社の元同僚女性(1949年生)の話では、2人と共に働いていた1970年代頃、近隣女性たちはみなバハールグルに刺繍技術を習い下絵を依頼して刺繍の装飾品を準備したという。ズライホーの知人も母もズライホーの少女時代について「勉強のできる子」と記憶していたが、刺繍技術に優れていたという話をする人はいなかった。それが事実だとすると、マディーナの刺繍技術を継承した姉妹たちの中でズライホーが最も優れた刺繍の師匠でもなく、唯一の技能継承者でもない点が明らかとなる。

そうであっても事業開始後のズライホーは、刺繍業の師匠として商品用刺繍の大量生産や事業規模拡大に向けて、姉妹を始め複数のヘシュから有形無形の援助を受けていた(表1参照)。2006年時点のズライホーの下請け制作所の6カ所中、一箇所はズライホーの妹グルノザが取り仕切り、もう一箇所は姉バハールグルの四男ハサンの嫁ムハッパットが采配する¹⁴⁾。図1の濃い点線部分はズライホー専属の下請けの仕事場を受けもつヘシュを示す。

〈表1〉ズライホーのヘシュと刺繍業への貢献

仮名	ズライホーとの続柄	生年	カシュタ制作業への貢献内容
ディロローム	母方祖母	1870	ズライホーの母マディーナにカシュタ技能伝授。商品用カシュタ制作には関わらず
マディーナ	母	1919	ズライホーを含む娘達にカシュタ技能伝授。商品用カシュタ制作には関わらないが、ズライホーに技能を継承した師として紹介される
バハールグル	姉	1949	ズライホーのカシュタ繡いの下請けをする。本人が繡うことは少なく、息子の嫁を手伝う
ムハッバット	姉の息子の嫁	1977	バハールグルの4男ハサンの妻。結婚前、ズライホーが教える工芸科で学び、カシュタ技能を習得。バハールグルのハウリに婚入後、バハールグルを通じてズライホーから、注文品を預かり、下請け制作の中心を担う。バハールグルの他の息子の妻や近隣の女性にも繡い方を指導する。ズライホーの6箇所（2006年）ある下請け制作所の内の一つを担当する
メフルグル	姉の息子の嫁	1975	バハールグルの次男の嫁。ムハッバットに繡い方を習い、カシュタ繡いの下請けをする
ディルフーザ	姉の息子の嫁	—	バハールグルの3男の嫁。ムハッバットに繡い方を習い、カシュタ繡いの下請けをする
グルノザ	妹	1955	ズライホーのカシュタ繡いの下請けをする。娘や近隣の女性に繡い方を教え、布地を分配し、煩雑になるシーズンに仕上げを手伝う。ズライホーの6箇所（2006年）ある下請け制作所の内の一つ
トイベギム	妹の長女	—	グルノザの娘。カシュタ繡いの下請けをする
グルルフソール	妹の次女	—	グルノザの娘。カシュタ繡いの下請けをする
アミン	次兄	1951	刺繍用針、糸巻きなど道具製作
ジョルアット	弟	1955	絹糸の精練作業の補助。2003年には関与無
カーディル	長女の夫	—	運転手、展示会の補助、材料の仕入れ、荷物運びなど補助。2003年には関与無
ナルギザ	異父姉の娘	1963	1997年、ズライホーが教える工芸科で短期間、カシュタ技能を教える教師をしていた。ズライホーと決別
シャフノーザ	異母姉の娘	—	1997年頃、ズライホーが教える工芸科で短期間、カシュタの色つけと人事を担当。ズライホーと決別

※ 2002年～2006年にかけて実施した聞き取りに基づき筆者作成

※ 生年の一は不明をあらわす。

元幼稚園教員だった妹グルノザは1997年から本格的に姉ズライホーの専属下請けの仕事 시작했다。ズライホーから下絵が施された布地と染色済み絹糸を受け取り、娘であるトイベギムとグルルフソール、近隣女性たちに注文品と糸を渡す。グルノザは注文品完成までの品質をチェックし、ステッチの指導や繻い直しの指示を出すばかりではなく、自身も繻い子として作品を仕上げる。注文品が完成すると、指定日に繻い子達自身がズライホーの仕事場に持ち込み、最終的な質のチェックを受けて賃金を受け取る。

グルノザはズライホーの刺繍事業発展にはヘシュよりもオイラの貢献こそ重要だと考えていたが、表1や表2のようにズライホーのヘシュからの貢献も認めている。例えば、ムハッパットはズライホーが1997年に開設した工芸科で刺繍技能を習得した300名を越す学生たちの内の1人であり、卒業後はズライホーから直接受注して作品を仕上げていたが、ズライホーの甥との結婚を機にズライホー専属の下請け制作者となった。ムハッパットは夫の兄弟の嫁や近隣女性たちにステッチを教え、繻い子数を増やすことで制作規模を拡大させた。ムハッパットやグルノザはズライホー専属で刺繍制作に従事するが、他の繻い子と殆ど待遇の違いはなかった。基本的に繻い子同様に制作枚数に応じた出来高制で賃金を受け取り、シーズン期になると繻い子指導代として5,000～1万スム(日本円でおおよそ500円～1000円程度¹⁵⁾)ほどのボーナスが出る。この値段はズライホーの他の下請け制作所を取り仕切る女性が受け取る値段と大差はない。

〈表2〉ズライホーの姻族と刺繍業への貢献

仮名	ズライホーとの続柄	生年	カシュタ業への貢献内容
ディルバル	夫の妹	1952	カシュタの下絵描き(1996～1997年まで)。ゴザルに下絵の描き方を教授(1997年～1998年まで)。無報酬
シャフロー	夫の妹	1953	ズルフィヤの母
マトルーヴァ	夫の姪	1983	ディルバルの娘。2002年から2004年までズライホーのカシュタ繻い子をした。その後、カシュタ繻い子をやめ、針子へ
ズルフィヤ	夫の姪	1984	シャフローの娘。1999年ズライホーが教える工芸科で学び、卒業後、ズライホーのカシュタ繻い子になる。2003年カシュタ繻い子をやめ、体育教師へ

夫イクラムのキョウダイ関係を始めズライホーの姻族でズライホーの事業に関わる女性もいる(表2参照)。ズライホーの直営仕事場には繻い子としてイクラムの妹ディルバルの娘であるマトルーヴァ、シャフローの娘ズルフィヤも通う。1997年にズライホーは地区のカレッジ¹⁶⁾(*kolej*)に刺繍技能を教える工芸科を開設したが、ズルフィヤもその工芸科の学生の1人であった。2002年にその工芸科が閉鎖すると制作に依

じた賃収入を得る繡い子として働き始めた。

マトルーヴァは母の勧めで2003年から繡い子として働き始めた。マトルーヴァの母であるディルバルはイクラムの家系で特に絵の才能に優れ、1998年以前はディルバルがズライホーの刺繍の下絵を担当していた。ディルバルは父方オバの1人に画法を習い、1998年頃からズライホーの長女ゴザルに画法の基礎を教えた¹⁷⁾。ディルバルは下絵や画法教授に対する現金報酬を一切受け取らず、布地や菓子といった贈物を受け取ったのみである。ディルバルはズライホーの下絵依頼が現金収入を得る事業経営のためと了解していたが、彼女への下絵の協力をヘシュとしての当然すべき相互扶助の範囲内と心得て、報酬を要求することはなかった。

ズライホーの工芸科開設に合わせ異父姉マイサラの娘ナルギザを刺繍指導員として採用した。またズライホーの異母姉の娘シャフノーザも刺繍の質のチェック、デザインへの配色と絹糸の配布など多方面にわたりズライホーの事業を支えた。だが筆者の調査開始段階で彼女たちはいずれもズライホーの事業から去っていた。ズライホーと彼女らの軋轢の事例は次節で詳しく紹介しよう。

上述のように、ズライホーの事業規模から比すれば雇用者数に占めるヘシュ数は決して多いとは言えない。学校教師であったズライホーには事業設立当初から学生、近隣女性、元同僚といった紐帯によるヘシュ関係にないベゴナ（他人）も彼女の事業発展に尽力していた。従ってヘシュの貢献でズライホーの事業が発展したと言えば明らかに語弊がある。ただ少数ながらもヘシュの雇用者がいることは、その少数者たちが他の雇用者たちと全く同じ状況で働いている訳ではないという事実も浮き彫りにする。次項で詳述するように、ヘシュと雇用関係を結ぶことは、ヘシュであるが故にある程度優遇される（もしくはされるはずだ、という期待を抱く）反面、ヘシュ関係にある者は相互扶助をすべきという制約も受ける。ゆえに事業という契約関係にあっても、ヘシュ同士の場合にはベゴナには期待し得ない道徳的規範が暗黙の内に期待されることになる。

だが容易に想像がつくように、相互扶助といった道徳的規範を活用してヘシュから特別な貢献を得つつ経済的成功を収めた場合、その反動とも言うべき葛藤や軋轢が生み出される。次項ではズライホーとヘシュの諍いの事例に注目する。

2 ヘシュの貢献と軋轢

以下では地区村落部でヘシュ関係に要される規範を明示するため、刺繍事業を営むズライホーとヘシュの諍いの事例を取りあげる。同時にこの事例を通じて村落部の人々が感じる嫌悪感、批判、不快感にも着目する。従って諍い当事者の見解と同様に、ヘシュ同士の諍いを耳にした村落部女性の論評にも注視する。

ナルギザとの軋轢

ナルギザはズライホーの異父姉マイサラの娘であり、ズライホーの姪に当たる（図1参照）。幼少時より手先が器用で手芸に関心のあったナルギザは、8才頃から母マイサラに刺繍のみならず手芸一般を習い始めた。ソ連時代に一貫制学校を卒業し、手芸の技能を生かすべく地区中心地の絨毯工場で勤務した経験を持つ。1991年独立と同時に勤務先の絨毯工場は倒産したため、暫時的に夫の収入と家畜販売、そして集団農場の綿花収穫で生計を立てていた。

1997年のズライホーの工芸科開設を機に、ズライホーから刺繍技能の指導員勤務の勧誘を受けた。1997年1月～11月までの11ヶ月間、彼女は工芸科刺繍技能の1クラスを受け持ち、学生35名に刺繍のステッチを指導した。1997年当時カレッジに通う学生も奨学金支給対象であり、その教員は公務員と認定されて給与が一律に支給され、ナルギザのような技能指導員も国から給与支給されていた。従ってズライホーは教員に指導代は支払わず、販売用作品の出来高に応じて謝礼を支払っていたのみだという。

一方、1997年のズライホーはインドで染色に関する海外研修参加に加え、商工業展示会、有名ホテルでの展示即売会、カザフスタン、クルグズといった近隣諸国における展示即売会への参加を予定しており、学校を度々不在にせざるを得なかった。学校不在の間、ズライホーは展示会出品用作品（1.5×2.5m以上の大判スザナ）数枚の制作をナルギザに依頼し、展示会で入賞すれば謝礼を払うという口約束をした。ナルギザは学生と共同して数ヶ月がかりで展示会出品用制作品を仕上げた。同年に商工業展示会の全国大会でズライホーは最優秀女性工芸家賞を受賞した。その功績に対してズライホーはナルギザに他の学生たちと同額の謝礼のみしか支払わなかったという。ヘシュゆえに、指導員という責任ある立場で特別な貢献をしたと感じていたナルギザは、ズライホーの対応に失望して彼女と決別し、独立した刺繍事業を営むようになった。ナルギザは「ズライホーは私の母方オバ（*xola*）でヘシュなのよ。ヘシュがひどいことをするなんて」と憤る。ズライホーの妹グルノザはナルギザに対し「ヘシュに対し金銭的なことを細かく言うのはおかしい」と苦々しく語る。この諍いをゴシップ話で取り上げた50代～60代の村落部女性たちは「表立ってヘシュに金銭の要求をすべきではないが、ヘシュの貢献に対する謝礼はベゴナより多くすべき」との見解を示した。

シャフノーザとの軋轢¹⁸⁾

シャフノーザはズライホーにとって異母姉の娘すなわち姪に当たる（図1参照）。1995年頃ズライホーの元に求職にやって来た。彼女自身は繻いを担当せず、繻いの質チェック及びデザインの配色決定、繻い子への糸の配布や繻い子の管理などを担当した。だがシャフノーザは彼女の貢献に対して、ズライホーが十分な経済的報酬で報

いない点に日頃から不満を募らせていたという。2000年当時、シャフノーザはズライホーから染色済み絹糸の管理を任されていたが、次第にズライホーの商売敵である刺繍家の所に絹糸を横流し始めた。その事実が発覚した時にズライホーから解雇されたという。

2006年時点で、シャフノーザはズライホーの商売敵の元で配色アドヴァイスや繡い子への指導をしていた。さらに自宅で染色を施した絹糸を別の刺繍家に販売するため、彼女は其他数人の刺繍家のもとを訪れ、地区で最高レベルと称されるズライホーと同じ染色済み絹糸を提供するので一緒に仕事しないかと誘うという。シャフノーザに話を持ちかけられた刺繍家の1人は「シャフノーザはズライホーのヘシュなのに恐ろしいことをする、恥知らずだわ」と語って慄然とした。

ズルフィヤとの葛藤

ズルフィヤはイクラムの妹シャフローの娘である。ズルフィヤはズライホーにとって夫の妹の娘、つまり義理の姪に当たる(図2参照)。2002年段階でズルフィヤは刺繍家ズライホーの繡い子として仕事をして4年目、1999年から2001年までズライホーの工芸科で刺繍技能を専門的に習得した熟練の繡い子である。多数の高級注文品を担当し、彼女の平均月収(繡い子仕事のみ)は1万スム(日本円で1000円程度)前後だった。だが2003年ズルフィヤは進学で市内に行くため刺繍繡い子をやめた、という。

進学志望以外に、ズルフィヤが刺繍の仕事を辞めた理由を母シャフローが筆者に伝えてきた。刺繍の仕事は緻密な作業を要し、近眼の怖れがある上、年金が支給される対象の仕事ではない。さらに賃金は2年間で変化せず、努力が報われない仕事と語る。「私の兄がズライホーの夫なので私たちはヘシュよ。本来お互いに助け合わなければいけないわ。それでズライホーの仕事場に娘を働きに行かせた。なのにヘシュのズルフィヤに辛い仕事を押しつけ、その働きに対してズライホーの賃金はあまりに少なすぎるわ」と不満を漏らした。2006年追加調査の段階で、ズルフィヤは地区の体育教師として勤務していた。

IV 考察——市場経済化と社会主義的理念の狭間で

ウズベキスタンのフェルガナ盆地で調査を実施した人類学者ラサナヤガムは「ウズベキスタンには中間規模の企業はない。あるのは大企業が零細経営かのどちらかだ」というウズベク人商人の言葉を引用している[Rasanayagam 2002: 55]。これはソ連時代から引き継いだ集団農場や国営企業か、家族単位で収入を得る零細な商売かのどちらかがウズベキスタンの経済活動の主流を占める様子を述べている。本稿で取り上げたズライホーの刺繍業はソ連時代の国営企業が民営化した大企業でも家族単位の零細経営でもなく、100人を超す繡い子を抱えた中間規模の企業であった。地区村落部

の人々にとってズライホーの企業形態がいかに目新しい形態だったかが理解しうる。それは単なる経営規模の差のみならず、家族単位の零細経営から規模を拡大する過程において、オイラという狭い範囲を超えた多様な人々を包括し、国家が統制する機関の労働者ほど没个性的に管理されない親密な関係にある人々——ヘシュ——を企業内に取り込むという新たな経験が付随していた。

ラサナヤガム論文では、マイクロレベルの観察から零細企業と大企業を別物とする二元論が批判され、ビルカッサ・ビルゴゾン (*bir kassa bir qozon*: 一生計一釜) を旨とする家族、地域共同体 (マハッラ (*mahalla*))、コルホーズや国営企業、国家までもが入れ子状の如く共通した特徴をもつ経済活動について論じられている。それは、家族、マハッラ、コルホーズといった集団内部に所属する個々人の成員の利益や貢献をめぐる不平等性は等閑視し、集団全体で支出入や消費を共にする一単位とみなす「共同参加領域 (Spheres of Communal Participation)」にあるという。具体的には、集団の1個人のみに入収があり、他の成員を経済的に支える場合でも、集団全体の収入もしくは財産と換算され、成員の必要に応じて分配される。個人が集団に成した貢献は将来的にその個人に役立つとされるが、集団内での貢献度の低い成員に対して批判が向けられることは少ない。

ラサナヤガムの提唱した「共同参加領域」は、社会主義的理念たる集団内の社会的弱者の保護といった機能が家族内のみならず国営機関などのあらゆる集団に広く浸透しているという指摘が特徴である。貢献度の高い者が多くを得る競争原理に基づく資本主義的理念に照らし合わせると、個人の貢献が集団に還元され、集団の全成員が貢献度の高い者と同様の配分を得る社会主義的理念の異質さが際立つ。その異質性に対し、個人の能力やジェンダー、各世帯の地理的な立地といった大半が生得的な要件から、資源へのアクセス権は元来不平等であり、その不平等が生得的である以上、個人では如何ともしがたく、ある個人が有する利益の格差は個人の能力や努力のみに帰するわけではないと説明される [Rasanayagam 2002: 62]。

確かにこうした「共同参加領域」は筆者の調査地でも見られた。例えば家族やヘシュのみならず、近隣や職場でつながる人間関係においても儀礼や日常的交流を通じて頻繁に相互扶助を繰り返す行為は、集団内で互いの需要を補い合う共同参加領域で遂行されていた。何らかの事情でその時に十分な貢献ができない個人は別の機会や形で貢献すればよいというように、ある時点での貢献度や技能の有無のみで弱者/強者を計らず、集団内で相互扶助すべきとする。だがS地区では家族やヘシュ、そして近隣や職場関係の人間たちが同じ強さの「共同参加領域」の規範を求められていたわけではない。職場や近隣といったベゴナに期待できる相互扶助とヘシュに期待するそれとは原理は同じでもその内容や強さが異なっており、ヘシュ同士は近隣や職場の人間といったベゴナより緊密に相互扶助をすべきとされていた。また筆者が観察した限り、共同参加領域には集団内で多く貢献をした人物に対する規範も重視されていた。すな

わち弱者を批判すべきではないとする反面、ある活動に多く貢献した人物でも自分の貢献を独占したり、誇示したりすべきではないとする規範の存在である。

だが本稿で扱った刺繍業の事例ではこの「共同参加領域」が十分に機能していない点が明らかになった。典型的にはズライホーの刺繍業の師匠継承の捉え方において、姉妹たち全員が刺繍技能を分かち合っていたにも拘わらず、その事実を等閑視して一子相伝で称号が継承されたかのように明示したことから、「共同参加領域」の規範とは異なる功績の寡占や誇示の考え方が見いだせる。

この「共同参加領域」が機能しなくなった背景として、市場に溢れる消費財と急激なインフレ、国営企業の倒産、福祉制度の縮小といった厳しい生活環境に人びとが直面し、「共同参加領域」を継続しうる経済的基盤を失いつつある点が指摘できよう。さらに注目すべきは、ウズベキスタンが採用した漸進的な市場開放政策による社会主義制度の温存と部分的な市場経済原理の導入という制度的混乱である。特に本稿で取り扱った刺繍業のような市場経済化で誕生した中間規模の企業では、往々にして市場経済化の現実と社会主義的な理念がぶつかり合う場となっていた。それは「共同参加領域」の規範のなかで互いに援助すべき関係であるヘシュが企業に取り込まれた結果、ヘシュの貢献に関する経済的価値をめぐって認識のズレが生じ、従来の社会関係に亀裂を生み出す原因となってしまったのである。この点についてアクション・グループという観点から本稿の事例でまとめてみよう。

まずズライホーの刺繍業に占めるヘシュの数は少なく、フリーマンが定義した程にはキンドレッド主体のアクション・グループは形成されなかった。だが共通の活動目的や目標達成に向けて参集するアクション・グループでは、日常的なつき合いの頻度より活動目的や内容に相応しい成員が求められると先述したように、商品用刺繍制作においてもズライホーとの親密さ如何でヘシュが選ばれたというよりも、むしろヘシュの中で刺繍が制作できる個人が選ばれていた。例えば、ズルフィヤはヘシュの1人として慶弔時にズライホーに接する機会はあるとしても、両親と同年代であるズライホーと以前から特別親しかった訳ではない。もともと刺繍に関心があったが故に制作に参加し、その結果ズライホーとの関係がより身近となったのである。ズライホーの刺繍業に勤務したヘシュたちの大半は「刺繍制作」という活動目的において参集した人々であり、この事実がヘシュの貢献をどのように評価すべきか、という問題を生み出した。

この問題はベゴナとヘシュを比較すれば明確になる。グルノザの事例にあったようにヘシュの報酬もベゴナのそれと大差なく、むしろ制作枚数という成果に基づいて報酬が支払われていた。ズライホーとヘシュ関係にない被雇用者（ベゴナ）にとっては親族如何で差別を受けない労働環境が提供されていたかもしれない。だがヘシュ同士の場合、必ずしもベゴナと同じ規範が適用される訳ではない。ヘシュからの呼びかけに応じて参集した個人にとって、如何なる仕事に従事しようと個人間を規定する第一

義の関係はヘシュであり、ヘシュとしての行動規範も求められるという矛盾があったのである。

フリーマンはボルネオ島イバン族の事例から、キンドレッド関係は核家族内において発達する諸感情の拡大としても説明され得ず、よそ者でもなくキンドレッド成員だからこそ争うことを指摘した〔フリーマン 1981: 215〕。そうであると、S地区村落部の刺繍制作の事例ではオイラでもなくベゴナでもないヘシュが事業に取り込まれた結果、互酬性による貢献と契約による権利義務の境界線をめぐる混乱が軋轢を生み出したと考えられる。

具体的には、事業収入を目的とした下絵依頼に対してディルバルのように無償で引き受ける者もいれば、ズライホーの娘ゴザルのように報酬を受け取る者もいる。このように同じ行為でも本人の判断次第で無償とも有償ともされる状況が生み出されたのである。他に些細な内容を含めれば、ヘシュ故に無償でズライホーの事業に協力したという人は多い。例えば、商品の運搬や絹糸用の繭の一時保管、煩雑期の人員確保や商談に出かけたズライホーの家事の手代わりといった仕事である。

これらの仕事がヘシュ同士の無償の相互扶助で行われるべきか否かの判断は、個人の主観や能力、経済的事情に大きく左右されることになる。特にソ連時代には手厚かった社会保障が削減されるに及んでより鮮明に個々人の価値観が問われはじめ、ヘシュ同士の貢献内容も相互扶助か金銭的報酬の対象かと判断せざるをえない状況もたらされたのである。ヘシュ同士の貢献内容及び貢献に対する期待内容の曖昧さをナルギザの事例から考えていこう。

〈表3〉ナルギザとズライホーの相互扶助／契約関係

相互扶助関係	ズライホー	貢献	村落部女性の就業が困難な中、ヘシュだからこそ学校の指導員に招いた
		期待内容	他の被雇用者より、真面目に（高いモラルで）働き、都合によってはヘシュとして融通（短期間での多数の作品制作）を利かせて欲しい
	ナルギザ	貢献	ヘシュの企業では、他の被雇用者よりも真面目に働く。指定期間内で特別に質の良い作品を多数制作して貢献した
		期待内容	特別な貢献には特別な賃金報酬で応じて欲しい
契約関係	ズライホー	義務	契約内容に沿った賃金支払
		権利	質の良い制作品を受け取る。繡い子指導を代替させる
	ナルギザ	義務	契約で請け負った仕事を仕上げる。繡い子の教育と指導
		権利	契約に応じた賃金受取

表3は、ナルギザとズライホーの軋轢の原因たる相互扶助と契約関係の交差をまとめたものである。表ではズライホーとナルギザの刺繍制作について、仕事の依頼と勤

務、仕事に応じた賃金の支払—受取といった契約関係のみならず、相互扶助関係（貢献と期待）も併記している。表の契約関係のみに注目すれば、ナルギザとズライホーは双方ともに権利義務関係を遂行しており軋轢が生ずる余地はない。だが、相互扶助関係においては互酬性に基づき相手に与えた内容に対し見返りとして期待する内容がある。ズライホーとナルギザの関係では、ナルギザは相互扶助関係が経済的報酬にまで及ぶと期待したのに対し、ズライホーは契約関係の範囲でのみ経済的報酬を捉えた点にズレが生じた。具体的には、繡い子たちと共同で作品を仕上げたナルギザは、指導員かつヘシュという立場から日常業務以外の特別な貢献（展示会出品用の制作）に対し、ズライホーから特別な謝礼を期待した。だが明文化される契約関係に対し、道徳的規範から明文化され難い相互扶助関係では、何をどこまでどのような返礼で応ずべきかの基準は曖昧であり、ズライホーはナルギザの期待に十分に答えられないというズレが生まれ、軋轢の原因となった。

この軋轢の事例では、刺繍制作という活動目的をもつアクション・グループにヘシュが参加することで、個人の貢献如何によらず成果を全体に還元させる社会主義的な「共同参加領域」の規範と、個々人の技能の優劣や貢献の多寡、功績に応じた報酬を受け取る権利を保障する資本主義的な理念が矛盾を来している点が見いだせよう。ズライホーは経営に成果主義や契約に応じた報酬といった資本主義的理念を採用していた反面、共同参加領域の理念に則ってヘシュであるナルギザの貢献を会社全体の成果として還元しようとしていた。一方、ナルギザは共同参加領域における相互扶助の考えからヘシュへの特別な貢献には特別な報酬が期待できるとした反面、自分の貢献を他の誰よりも高く評価されることを望むという成果主義の考えをもっていた。2人の軋轢に対する村落部の人々の見解では、ヘシュの相互扶助でズライホーはナルギザの貢献に経済的報酬を割り増しして支払うべきという意見と、ヘシュなのに報酬を要求する行為を非難する意見が両立し、統一されていなかった。これは中間規模の民営企業という新たな形態に如何なる道徳的規範が適用されるべきかという問題に統一の見解がない点を示唆している。個人的諍いに統一の見解がないのは一般的なことだが、シャフノーザの事例では相互扶助関係における特別な経済的期待が強すぎるあまり、糸糸を横流しするシャフノーザの行為は村落部の女性たちの大半を震撼させた。

グルノーザとムハッパットは、ズライホーのヘシュだからこそ優先的に仕事を得ていた。特にムハッパットは結婚後にズライホーのヘシュとなることで、安定的に仕事を受注できるようになった。故にヘシュの事業に関与することは、優先的に仕事を受注できる環境が保証されることになる。だがその反面、彼女たちに高い刺繍能力があってもズライホー専属とならざるを得ず、他の繡い子が行っているように複数の刺繍家からの注文品の掛け持ちすることはできない。ズルフィヤの母シャフローは、娘の刺繍技能に対するズライホーからの経済的報酬の低さに不満をもっていた。だがヘシュの商売敵である他の刺繍家から娘に受注させることもしなかった。ヘシュの事業妨害

は強い道徳的批判にさらされるため、積極的な貢献はせずとも明らかな離反行為もできなかったのである。

これらの事例の分析から、事業という契約関係にあっても、ヘシュ同士の場合はベゴナには期待し得ない相互扶助関係が暗黙の内に期待されていることが理解できる。だがそこではかつて親しんでいた社会主義的な理念が反映された「共同参加領域」も十分に機能せず、かといって市場経済の原理に完全に則る訳でもない。基準の定まらないルールが支配する環境でヘシュ同士は互いに相争うのである。

V おわりに

本稿では、相互扶助関係を旨とするヘシュの貢献と、そのトラブルを事例に、ズライホーの刺繡業を社会主義的な理念と市場経済に応じた事業が交差する場として分析した。本事例ではキンドレッドであるヘシュがアクション・グループを形成する場合には見られがちな軋轢に着目し、市場経済化がヘシュにもたらす遠心力を指摘した。ズライホーの妹であり、自身もズライホーの事業に貢献しているグルノザがヘシュの貢献はズライホーの事業拡大に大きな影響を持っていないと述べたのは、市場経済化で進行しつつある家族単位による経済活動の拡大と、成果や能力主義の浸透でこぼれ落ちてしまう相互扶助関係を実感していたからかもしれない。本稿の事例は資本主義的価値観に慣れ、市場経済を当たり前に入れている我々の目には特に珍しい事例には映らず、その重要性を見過ごしがちである。だが彼らが体験しているミクロな社会関係の変化、特に「共同参加領域」のような道徳的価値観の崩壊——それは我々に馴染みのある価値観に染まっていくことでもある——こそ、社会主義の理念に親しんでいた人びとにとって未来に不安を感じる一因となるのではないだろうか。

むろん、市場経済化は旧ソ連中央アジア諸国といえども国や時期により状況が異なり、今後も多様な側面から研究を継続する必要がある。またウズベキスタンでも社会主義時代を知らない若い世代が急速に育ちつつあり、社会主義に代わる新たな価値観が求められてもいる。だがこの国が随所に残す社会主義的な要素は自覚の有無に拘わらず若い世代にも形を変えて引き継がれ、豊かな可能性をもたらすと同時に亀裂を生み出す原因ともなるのである。

謝辞

本稿は平成13年度文部科学省アジア諸国等派遣留学生による奨学金、平成17年度独立行政法人国際交流基金「知的交流フェローシップ」研究助成金、人間文化研究機構地域研究推進事業（NIHUプログラム）「イスラーム地域研究」研究助成金を受領することで可能となりました。ここに記して感謝の意を示します。

注

- 1) ウズベキスタンの刺繍業(カシユタ)と筆者の調査地(ウズベキスタン共和国ブハラ州ショーフィルコーン地区(以下S地区))について、詳しくは今堀 [2006a、2006b、2008、2010] を参照のこと。以下、本稿でウズベキスタンの刺繍といった場合カシユタを指し、具体的事例は筆者が調査を実施した2002年~2004年、2006年、2007年、2009年の通算約32ヶ月間に収集した内容に基づく。
- 2) 2010年4月、中央アジアのクルグズにおいて反政府勢力の野党と治安部隊が衝突し、当時の大統領であるバキエフが国外逃亡して政権交代が行われた事件。この事件に関連して同年6月にはウズベキスタンとの国境に近い都市オシユでクルグズ系住民とウズベク系住民が対立し、多数の難民がウズベキスタン領内に避難した。
- 3) 例外として吉田 [吉田 2004] がある。吉田は独立以降の親族ネットワーク強化と同時に世帯毎の収支計算や世帯戦略が持ち込まれた市場経済化を分析する中で、親族ネットワークに作用する遠心力にも言及している。
- 4) 例外は村落部に住むホジャの子孫と自称する人々であった。アイケルマンの指摘「ある名前の連鎖が、何世代にも亘って廻りうるといふ断言には(その名前の持ち主が: 筆者註) 通常、非常に高い地位にあるか、「高貴」な家柄 (antecedents) をもつか、もしくは預言者ムハンマドの出自にあたるという事実を暗に主張しているに過ぎない」 [Eickelman 2001: 175] のように、村落部では聖者の子孫など高貴な家柄の者たちを除き、系譜は厳密な集団形成原理となっていなかった。
- 5) オイラは時代や地域、文脈によって使い方が異なるが、筆者が調査した地域では第一義的には核家族を指すようであった。ゆえに本稿では起点個人を中心とした核家族を指す言葉として用いる。
- 6) 標準ウズベク語のカリンドシュ (*qarindosh*) に相当する。筆者の調査地ではカリンドシュよりもヘシュが多用されていた。以下本稿では、一般的に人類学で言うキンドレッドにほぼ相当するウズベク語の概念としてヘシュを用いる。ただし筆者の調査地ではヘシュには姻族も含まれる。ゆえに先行研究に基づくキンドレッド関係を説明する場合キンドレッドと表記し、筆者の調査データに基づく関係にはヘシュという現地語を用いていく。
- 7) ヘシュ関係で用いられる呼称は、あたかも擬制的親族関係の如くヘシュ関係にない親しい間柄でも用いられる。だがそれらで呼び合う人々が互いをヘシュと紹介し合うことはない。詳しくは注9) 参照。
- 8) ウズベク語では地域によって親族名称が異なる。調査地で用いられる主な親族名称は以下の通り。*ota* (父)、*ona* (母)、*bobo* (祖父)、*bibi* (祖母)、*opa* (姉)、*aka* (兄)、*uka* (弟、妹)、*qiz* (娘)、*og'il* (息子)、*amaki* (父方オジ)、*amma* (父方オバ)、*xola* (母方オバ)、*tog'a* (母方オジ)、*nabira* (孫)、*yanga* (兄嫁)、*yazna* (姉婿) などである。父方、母方のオジオバは明確に区別される。
- 9) ヘシュは親族関係にない隣人や友人といった「身内」カテゴリーに含まれる人々とも区別されている。隣人はハムソーヤ (*hamsoya*)、友人はドゥゴーナ (*dugona*: 女性友達)、オルトク (*o'rtok*: 主に男性友達) が用いられる。ヘシュ同士を呼び合う呼称として、親族名称が明確ではない遠い関係のヘシュには年上女性にヤンギヤ (*yanga*: 兄嫁)、年上男性にはアマキ (*amaki*: 父方オジ)、既婚の年下女性にはケリン (*kelin*: 嫁)、未婚の年下男女にはウキヤ (*uka*: 妹・弟) と呼びかける。
- 10) 結婚 (*nikoh to'y*)、誕生儀礼 (*tavallud*)、揺りかご儀礼 (*beshik to'y*)、割礼 (*sunnat to'y*)、干支儀礼 (12歳の祝い: *muchal to'y*)、葬式 (*tajiya*) などの人生儀礼を指す。
- 11) ナウルーズ (*nauro'z*: 3月21日)、国際女性デー (3月8日) が多い。
- 12) パーティは任意で不定期に開催され、参加者は必ずしも固定的ではなく、宗教的な意味合いはない。調査地区ではカンディヨティやコロテエフ [Koroteyeva and Makarova 1998] が取り上げたギャブ(参加者が出資金をもちより、交替で受け取る講 (*chyornaya kassa*: ロシア語) を伴うパーティ) はさほど盛んではなく、パーティと講は別途実施されていた。
- 13) 先述のように、ズライホーのヘシュには彼女のオイラは含まれない。ここで言う彼女のオイラとは彼女と配偶者、そして彼らの子どもたちである。彼女のキョウダイや両親もオイラとみなされることがあるが、本稿では彼女の両親やキョウダイはオイラに含めず、ヘシュに分類しておく。ただし既婚の娘達はズライホーにとってオイラであるが、娘の配偶者たちはヘシュと考える。この分類はズライホー自身のオイ

ラとヘシュの使い分けの区分法に則っている。

- 14) 残り4カ所は、ズライホーが工芸科で刺繍技能を教授した繡い子や教師達である。
- 15) ウズベキスタンの通貨スムの換算レートは調査(2003年)当時のレートを用いている。
- 16) カレッジとは義務教育である9年間を修了した学生(通常15歳まで)が通う主に職業訓練を目的とした学校である。日本の高等学校に相当する。
- 17) 明確な継承ルートに関する語りは確認できなかったものの、刺繍が母系ライン(母から娘)を通じた継承方法を取るのに対し、同じ女性から女性への技能伝承でも、画法については父系ライン(父方オバから兄弟の娘へ)で継承されている(図2参照)。
- 18) シャフノーザに関する情報は地区の他の刺繍家たちから得ている。従って当事者の見解が十分に含まれないため事実に基づかない憶測も多分に含まれている可能性がある。筆者がシャフノーザに関して確認できた事実はズライホーの異母姉の娘という点、筆者が確認した2002年以降、ズライホー以外の刺繍家の元で配色の補助に従事していた点、自宅で絹糸を染色して地域の刺繍家に販売していた点である。

参考文献

今堀 恵美

- 2006a 「ポスト・ソビエト期におけるカシュタ(刺繍)制作と副業——ウズベキスタン・ブハラ州ショーフィルコーン地区の事例から」『日本中東学会年報』21(2):113-140。
- 2006b 「市場経済におけるカシュタチ(刺繍屋)事業の誕生——ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区の事例から」『社会人類学年報』32:57-84。
- 2007 「ウズベキスタンの刺繍制作から見る『女の仕事』と家族主義」『アジア女性研究』16:145-148。
- 2008 「持参財を飾る刺繍、販売する刺繍——ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区のカシュタ制作を事例に」『ポスト社会主義人類学の射程』(国立民族学博物館調査報告78)高倉浩樹・佐々木史郎(編)、pp.451-480、国立民族学博物館。
- 2010 「ウズベク刺繍カシュタがもつ『もの』の力」『もの人類学』床呂郁哉・河合香史(編)、pp.117-122、京大出版会。

清水 昭俊

- 1987 『家・身体・社会——家族の社会人類学』弘文堂。

ダダバエフ、ティムール

- 2010 『記憶の中のソ連——中央アジアの人々の生きた社会主義時代』筑波大学出版会。

樋渡 雅人

- 2008 『慣習経済と市場・開発——ウズベキスタンの共同体にみる機能と構造』東京大学出版会。

フリーマン、ジョン・D.

- 1981 「キンドレッドの概念について」小川正恭他(訳)、『家族と親族——社会人類学論集』村武精一(編)、pp.199-229、未来社。

吉田 世津子

- 2004 『中央アジア農村の親族ネットワーク——クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』風響社。

Eickelman, D.F.

- 2002 *The Middle East and Central Asia: An Anthropological Approach Fourth Edition*. New Jersey: Prinice Hall.

Kandiyoti, D.

- 1998 "Rural Livelihood and Social Networks in Uzbekistan: Perspectives from Andijan." *Central Asian Survey* 17(4): 561-578.

Koroteyeva, V. and E. Makarova.

- 1998 "Money and Social Connection in the Soviet and Post-Soviet Uzbek City." *Central Asian Survey* 17(4): 579-596.

Hiro, D.

- 2009 *Inside Central Asia: A Political and Cultural History of Uzbekistan, Turkmenistan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, Tadjikistan, Turkey and Iran*, New York and London: Overlook Duckworth.

Naumkin, V.

- 2005 *Radical Islam in Central Asia: Between Pen and Rifle*, Oxford: Rowman and Littlefield.

Obloberdieva, Z.

- 2002 *Buxoro Kashtachilik San'at*. Buxoro: Buxoro Nashriyoti.

Poliakov, S.P.

- 1992 *Everyday Islam: Religion and Tradition in Rural Central Asia*. M.B Olcott (ed.), A. Olcott (tr.) New York and London: M.E. Sharpe.

Rasanayagam, J.

- 2002 "Spheres of Communal Participation: Placing the State Within Local Modes of Interaction in rural Uzbekistan." *Central Asian Survey* 21 (1): 55-70.

Werner, C.

- 1998 "Household Networks and the Security of Mutual Indebtedness in Rural Kazakhstan." *Central Asian Survey* 17 (4): 597-612.